

病理専門医部会会報

平成 30 年 7 月

=委員長・支部挨拶=====

病理専門医部会長に就任して

大阪大学大学院医学系研究科病態病理学・病理診断科

森井 英一

平成 30 年度から、北川昌伸理事長のご高配により、病理専門医部会長を担当させていただくこととなりました。昨年度まで部会長、専門医制度運営委員会委員長として、会員の皆様にわかりやすい専門医制度の構築にご尽力いただいた北川理事長のご指導のもと、より良い専門医制度の維持、発展に務めたいと考えております。



平成 26 年に日本専門医機構が一般社団法人として設立され、当初は平成 29 年度から全面的なプログラムを開始するとされていましたが、ご存知のように制度が与える地域医療体制への影響の懸念から、厚生労働省、日本医師会、日本医学会連合等から意見や声明が出され、それに伴い専門医機構自体の体制にも変革が加えられました。病理学会では深山正久前理事長、黒田誠元部会長、北川前部会長の卓越した指導力のもと、また専門医部会、病理学会員の皆様の絶大なご協力もいただき、新しい専門医制度に向けた体制が構築されており、当初の予定どおり、試行として平成 29 年度より新専門医研修システムを開始しました。そして、本年度より本格的に新しい専門医研修システムを開始することができました。今後は、継続的なシステム運用に尽力したいと考えます。その中で議論を開始しないといけない点は、サブスペシャリティ領域の専門医制度の構築です。今後、日本臨床細胞学会との協議により、まず細胞診専門医を日本専門医機構の認定するサブスペシャリティ領域の専門医とすべく努力して参りたいと考えております。

病理専門医の資格更新も順調に行われています。平成 27 年秋に新たな更新制度がスタートして、昨年秋で 3 回目の更新手続きが終わりました。関係各位の先生方の多大なるご尽力で、更新手続きもわかりやすくなってきたと思っておりますが、引き続きわかりやすい更新を志向していきたいと考えております。

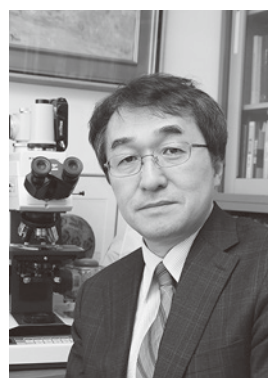
専門医制度の大きな目標の一つは、国民のニーズに応えられるような専門医の育成と生涯教育の充実です。生涯教育委員会の先生方の努力で教育コンテンツも充実しつつあります。社会が注目する専門医制度の刷新事業の中で、病理専門医はますますの信頼を勝ち取るとともに、認知度を上げることを目指すことが肝要と考えております。全国大学病院病理部・病理診断

科会議、指導者連絡会議、専門医部会、総会等を通じて密な情報交換を心掛け、専門医・会員の方々のご意見も取り入れながら専門医制度をより良いものにするよう努力する所存でございます。是非 皆様のご協力をお願い申し上げます。今後も病理専門医制度がさらに充実していくことを期待して、私のご挨拶とさせていただきます。

北海道支部長の第 2 期目を迎えるにあたり

旭川医科大学病理学講座腫瘍病理分野 西川 祐司

このたび北海道支部長を 2 期目として引き続き担当させていただくことになりました。この 2 年間は不慣れなためご迷惑をおかけしたことも多くありましたが、北海道支部の主な活動であります、標本交見会、病理談話会、病理夏の学校を皆様方の暖かいお力添えのおかげでなんとか無事に実施することができました。ご協力に心より感謝申し上げます、これからの 2 年間に北海道支部および日本病理学会のためにきちんと勤め上げることができるよう精進いたします所存です。



昨年は病理学会の JP-AID プロジェクトに支部代表として参画する貴重な機会をいただきました。何度か連絡会議に出席し、人工知能を用いた画像解析の最新知見に触れることができ、これからの病理診断学への人工知能の技術革新のインパクトの大きさを感じました。まだ試行錯誤の段階で、具体的なイメージはつかめませんが、近い将来に人工知能は確実に病理診断の中枢に入り込むことになると思います。そのような状況で、病理医がどのようにしてアイデンティティを保つとともに、価値を高めていけるのが、これからの大きな課題だと確信するにいたり、自問自答する日々が続きました。結論を出せる問題ではないかも知れませんが、人工知能との対比により、本来あるべき病理医の姿がより鮮明に浮かび上がってくるような気がしております。すなわち、個々の症例を病理医自身の目で丹念に検討し、臨床データとつぎ合わせながら正確に診断するとともに、臨床医と綿密に討議し、全身病態との関連性のもとに病変を理解しようと真剣に努力する病理医です。また、科学の他の分野と同様に、現在の病理学の体系はけっして完結しておらず、常に開かれたものであり、私たち病理医の今後の研究成果により刻々と形を変えていくダイナミックなものです。さらに、病理学においても未解明の部分がいかに多く残されているかは言を俟たないところです。おそらく人工知能は病理医が日々いただく

疑問はもたないでしょうし、病理学の体系を正しい方向に導く能力は将来的にも獲得できないのではないのでしょうか？ 人工知能が診断業務に日常的に進出しても、私たちがリサーチマインドを失わなければ病理医の存在価値はさらに高まっていくものと楽観したいと思います。

昨年は第50回の病理談話会が開催され、今年は標本交見会が第50回目を迎えます。この節目において、多くのすばらしい先達により築き上げられた北海道支部を担当することの責任をあらためて感じております。支部活動を円滑に進めるとともに、病理学の魅力を広く伝え、若手病理医の育成にも微力を尽くしたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

東北支部長就任のご挨拶

岩手医科大学病理診断学講座 菅井 有

この度東北支部長を担当させていただくことになりました。よろしくご指導、ご支援のほどお願い申し上げます。

現場の病理医がどのような問題点で悩んでいるのか、具体的にどのような支援が可能か、それらを知り、可能であればその対策を考えることは病理学会の重要な任務の1つと思います。現場の病理医の最も近いところにいる支部会はその役割を担うことができます。国家に例えるのであれば、病理学会が政府とすれば支部会は地方公共団体に相当するのかもしれません。地方公共団体は住民サービスを担当することになりますから、支部会も現場の病理医が有する諸問題の解決に尽力することが重要と思います。私は支部長として東北・新潟の病理学的諸活動の現場に生起する諸問題に敏感でいたいと思います。支部で解決困難な問題も多いと思いますが、その場合は病理学会への橋渡しをすることも必要になると思います。会員と一方向ではなく双方向の会話がより容易であるのは、まさに支部会であると思います。支部会は現場の病理医の需要が何であるのか積極的に感知し、可能であればそれらを適宜供給することが支部会の重要な使命と考えます。

支部会では主に症例発表がなされています。その中には貴重な症例が多くあり、症例報告もしくはcase reportとして英文投稿すべき症例もあります。しかしながら、そのような症例が最終的にどのような扱いになっているのか支部会としては把握できていないのが現状と思います。支部会で発表された症例については支部会としても可能な限り関与を高めていきたいと思っています。症例も発表しっぱなしでは駄目ですので、是非論文化を促していきたいと思っています。症例報告は同様の疾患の扱いに悩

む現場の病理医に有用な情報を提供します。また医師の論文活動の初期訓練としても重要と思います。自分が書いた文書がPDF化され、それを受け取るのは気持ちの良いものです。中堅、若手の先生にそのような喜びをより多く実感していただきたいと思っています。

最後に若手の先生には是非得意領域を持って欲しいと思います。しかしそれは特定の領域・臓器の病理診断がただ得意になるということではなく、論文（特に英文論文）に裏打ちされた見方、考え方であって欲しいと思います。これまでの定説に拘泥することなく、ご自分の考えを主張することは重要な姿勢ですが、科学的な基礎知見を自ら蓄積することによって主張していただきたいと思っています。若手の先生の今後のご発展を大いに期待しています。

私自身まだまだ浅学、非才の身ですが、病理学会、支部会のお役に立ってまいりたいと思いますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

関東支部長に就任して

横浜市立大学大学院医学研究科・医学部 病態病理学 大橋 健一

今年度から日本病理学会関東支部長に就任いたしました横浜市立大学の大橋です。関東支部は所属会員数が1,700名を超える大所帯ですが、前任支部長の日本医科大学内藤善哉教授、副支部長の北川昌伸教授により堅実に運営されてきました。これまでの歴代支部長が築き上げてきた支部を着実に引き継ぎ、会員の皆様に役立つようにさらに発展させていきたいと思っています。

私は1990年に大学院を修了した後、虎の門病院、都立駒込病院、東京医科歯科大学附属病院病理部、東京大学附属病院病理部など病理診断部門の現場で働いてきました。実質横浜市立大学に異動して初めて医学部講座で働くことになったわけですが（附属病院病理部長兼務ですが）。自分自身がこれまで病院勤務が主であったため、病院で働く会員の皆様のご苦労、悩みは比較的理解しているつもりです。実際病理学会におけるこれまでの仕事も、医療業務、病理標榜科に関するもの（医療業務委員会、診断体制委員会）、男女共同参画に関するもの（企画委員会、男女共同参画委員会）、人材育成に関するもの（人材育成委員会、若手リクルート委員会）、専門医制度に関するもの（専門医制度運営委員会、試験委員会など）など、病院病理医の活動に直接関係するものでした。これらの中では特に若手のリクルートに関する仕事には思い入れがあり、夏のレジナビフェアにはこ



れまでずっとお手伝いしてきて、多くの病理医を引き込んできたと自負しております。

関東支部は多くの会員を抱える大所帯であり、着実に活動内容は進歩、充実化しておりますが、まだ課題がまったくないわけではありません。限られた予算の中で多くの会員の皆様に情報を確実に伝達することだけでも難しいです。これまでメーリングリストを用いた伝達システムを整備してきましたが、まだ完全なものではありません。今後さらに整備する必要があります。副支部長の帝京大学宇崎教授には関東支部ホームページの整備をお願いしております。ホームページの内容も今後さらに充実すると期待されます。学術集会については講演会の内容はますます充実してきておりますが、参加者がさらに増え、多くの症例が集まり、活発な議論が行われるように努力をさらにしていく必要があると考えます。また、関東といっても病理医が多く集まっている東京とそれ以外の地域では若手病理医のリクルート状況に違いがあります。これまで夏の学校などを通して学生、研修医に対するリクルート活動を行ってきましたが、今後さらに内容を充実させ、東京以外の地域のプログラムにも多くの専攻医が集まるような支援活動が必要だと思います。

今後関東支部の発展に力を注ぐ所存ですので、ご支援、ご協力よろしくお願いします。

中部支部長

名古屋大学医学部附属病院病理部 中村 栄男

平成30年4月から2期目として、日本病理学会中部支部長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。支部会員数は600名を超え、夏と冬の交見会、春のスライドセミナー、夏の学校の開催、支部コンサルテーションシステムを行なっています。

日本病理学会中部支部は2000年に日本病理医協会中部支部から移行し、栄本忠昭先生（名古屋市立大学）、中沼安二先生（金沢大学）、白石泰三先生（三重大学）、野島孝之先生（金沢医科大学）が歴代の支部長を務められ、日本病理学会中部支部の発展に尽くされました。それぞれの交見会やスライドセミナーで活発な議論と着実な活動がなされており、会員相互が信頼し、非常に円滑な支部の運営がなされていると感じております。

交見会、スライドセミナーは参加者が180名に達することも多くなり、2013年の冬の交見会では初めて200名を超えました。特に若い病理医、女性病理医の参加者が目立ちます。病理学会の100周年記念事業として、本部から託児所開設への補助が付き、以前は利用会員に一部負担金をお願いしていましたが、現



在は支部の会計と併せて無料で提供しています。毎回、乳児と児童が数名ですが、お母さん病理医にとって、交見会に参加しやすい環境になっていると思います。

中部支部の長年の課題の一つは、多くの症例が交見会やスライドセミナーで発表されているにも関わらず、機関誌である「診断病理」への投稿が極めて少ないことでありました。この解決を目指し、また将来を担う病理医を育成することを目的として、前任の野島孝之先生のご尽力により幹事会、総会での議論を経て中部支部学術奨励賞が設立されました。内容は、筆頭発表した若手病理医を対象とし、受賞者には発表内容の「診断病理」への投稿を義務づけると共に、中部支部は投稿料の補助を行う形となっております。若手病理医は専門医試験合格前（カテゴリーA）、専門医試験合格3年以内（カテゴリーB）に区分し、交見会及びスライドセミナーの総会時に表彰しています。2012年冬の交見会から開始し、5回の会で、カテゴリーAが12名、カテゴリーBが3名、その他、最優秀発表者などを表彰しています。若手病理医にとって受賞は刺激的で、励みになるものと確信しています。受賞者の施設指導医の努力もあり、「診断病理」への投稿数は順調に推移しています。

事務局の主な業務は、本部から会員への各種情報の配信、交見会やスライドセミナーの世話人への支援として、症例募集、標本発送、交見会当日の手伝いなど、また、協賛企業との折衝、ホームページの充実による会員への情報提供、バーチャルスライドシステムの管理などです。これからの2年間、本部とより緊密な連携を取って、中部支部の発展のために尽力いたします。支部内外の皆様にはご支援、ご指導のほどをよろしくお願いいたします。

近畿支部

神戸大学大学院医学研究科病理学講座病理学分野 横崎 宏

平成30年度より日本病理学会近畿支部長を拝命いたしました。よろしくお願いいたします。

近畿圏2府4県をカバーする本支部の会員数は約600名、所属する病理専門医・口腔病理専門医は400名を越えます。支部の主たる活動は年4回（通常5月、9月、12月、2月）土曜日に開催する支部学術集会です。午前中の症例検討、午後からの学術集会毎に決定されたテーマについての特別講演および病理講習会を実施しています。症例検討では、主として若手病理医の発表に対して、毎回多く活発な時に厳しい意見が交換されています。午後からのテーマ毎講演会・病理講習会は臓器毎の診断に関するものを



中心に行っていますが、本年度からは「AI 診断」、「病理解剖」、「コンパニオン診断」など横断的な情報を得ることのできる企画も導入する予定です。この様な学術集会の企画は若手から中堅どころの支部会員で構成される支部学術委員会主導で検討されており、学術委員には学術集会での症例検討や講演会の座長、支部学術奨励賞の審査等もお勤めいただいています。これまでの支部活動で引き継がれ、定着してきたこの様な支部学術委員会システムは、若手病理医・研究医に活躍の機会を与える観点からも有効と考えており、今後もこれを更に発展させて若手病理医・研究医が支部学術活動に積極的に参加できる機会を増やしていきたいと考えています。近畿地区は交通の便にたけ、学術集会参加者は年々増加してきております。これから多くの会員にご参加いただき、病理医間の連携を深め、学術的な知識の習得のみならず、様々の情報交換の場となることをのぞんでおります。

若手のリクルートは支部活動における重要な課題と考えています。平成 26 年度より近畿支部におきましても医学生や初期研修医を対象とした「夏の学校」を 8 月に開催しております。地域性を加味して土曜日の午後半日で実施していますが、事後アンケートの解析からは、過去 4 回とも参加者からの感想は好評であり、そのなかから病理診断科や病理の大学院に進まれる方も出ております。本年度は 8 月 25 日（土）に神戸大学で開催を予定しています。今後もこの企画が定着し発展していくよう努力してまいりたいと思っております。

本年度より新しい研修制度が開始され、近畿地区においても 8 つの研修プログラムが稼働しております。支部としましても、各研修施設と連携をとりつつ、情報を遅滞なく病理を希望する研修医に伝えていけるようにしていきたいと思えます。また、専門医更新のための研修内容につきましても、最新の情報を会員の皆さんに遅滞なく伝え、混乱の無いようにしていきたいと思っております。

また、支部会員のご意見やご要望を把握し、日本病理学会の運営に反映するのも、支部の役割の一つと考えます。ご意見等ありましたら忌憚なく支部事務局までお寄せいただきたいと思います。近畿支部発展のため、尽力させていただきたいと考えておりますので、ご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成 30-31 年度 中国四国支部の活動について

川崎医科大学病理学 森谷 卓也

中国四国支部の皆様からは、4 年間多大なご支援をいただき活動してまいりましたが、引き続き 2 年間、支部長をさせていただきますことになりました。

支部活動の柱は、年 3 回開催される支部会（スライドカンファレンス）と病理学夏の学校です。支部会はこれまでに 125 回開催され、2,700 を超える症例が発表されています。その多くは

バーチャル化され、発表データ（pdf）と診断投票結果、演者診断、座長コメントなどの貴重な資料が蓄積されています。昨年度に開始された AMED 事業への、支部としての協力もこの中から行われており、継続して適切な対応を致したいと思っております。また、カンファレンスごとに学術奨励賞、優秀演題賞が選定され、これまでに以上に多数の優れた発表がなされております。病理専門医更新要件にもなっている講演会（年 1 回は共通講習を実施）も毎回素晴らしい内容のものです。さらに、各委員会のご協力のもと、カンファレンスの開催マニュアル、演題登録システムなども改訂を重ね充実してきており、会員の皆様の利便性も増していると実感しています。今後も、支部会をお世話いただく先生とも連携しながら、支部会がさらに充実発展するよう、努力致します。

病理学夏の学校は支部内の 10 大学が持ち回りで開催しており、今年で 19 回目となります。間もなく 2 順目を終え、次のクールに入りますので、これまでの実績を検証し、開催のあり方や予算面も含めて、3 順目のプランを策定させて頂く予定です。ぜひ、多数のご意見をお寄せ頂けましたら幸いです。また、軌道に乗ってきた若手病理医の会については、さらに発展させ、リクルートにも繋げていただけるよう、ご意見を聞きながら進めさせていただきたいと思えます。支部会等のイベントにおける託児に関しては、当支部は他に比してやや実績が少ない印象がありますので、今後もしっかりアナウンスをしてゆきます。

2 年間の支部役員は、丸山理留敬先生（副支部長）、武島幸男先生（庶務・会計担当幹事）、常山幸一先生（広報担当幹事）、坂東良美先生（業務担当幹事）、村上一郎先生（学術担当幹事）、吉野 正先生（監事）をお願いを致しております。委員会委員の皆様、支部会員の皆様におかれましても、支部活動へのご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

九州・沖縄支部便り

福岡大学医学部病理学講座・病理部/病理診断科

鍋島 一樹

5 月に入り、まさに風薫る新緑の美しい頃となりました。今年は緑も早く、福岡大学医学部前の植え込みもすでにりっぱな茂みになりつつあります。

この度、九州沖縄支部長を拝命いたしました。二期目となりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。支部活動はいつて順調ですので、前任の横山支部長からの基本の方針を継承し、さらに伸ばして行けるように支部会員皆様のお手伝いができればと思っております。年 6 回のスラコンと年 1 回



の病理集談会が支部活動の基本で、標本の見方、考え方を広く学べる大切な機会ですし、各分野で急速に進む診断技術や知識をupdateする貴重な機会です。次世代への継承というのは大切なテーマだと思いますが、九州沖縄支部では若手の勉強のためのツールもよく整備され、また若手自身による勉強会も積極的に催されています。各領域の代表的疾患を集めた



ティーチングファイルが横山支部長の時に整備されましたが、この度2017年度にティーチングファイル委員会委員長の河野真司先生の熱いリードで、多くの先生方の協力を得て、ブラッシュアップ作業が完了しました。この2018年1月より新しい標本が回覧され、新たな解説用PowerPointがホームページ上で閲覧可能となったところです。退色およびエアの入った標本の再染色や再封入は約1,000枚におよび、既存の261疾患の説明がupdateされ、新規疾患159も加わり、総数は1,170疾患となりました。病理専門医試験レベルのものに加えて、各専門領域の先生方から「これは知っておいた方がよい」と推薦された疾患も加わり、生涯教育に役立つ内容となっています。「若手病理医の会」も熱心で、年2回、スラコンの日にあわせて、午前中にこのティーチングファイルを使つての勉強会や支部の先輩による講演会を企画しています。その際には、要望があれば託児所設置も午前中から行っています。今年で第8回を数える病理学校も、参加者から病理医の道を歩み始めた者が毎年出ており、病理医の存在と魅力を知ってもらえる大切な取り組みと考えています。

一方でデジタル化に伴う課題もあります。スラコン標本や発表後のまとめスライド、ティーチングファイルのホームページ上へのアップは多くの会員に利用され、有用ですが、サーバーの維持には費用もかかります。近年はセキュリティー対策も必要となってきました。各支部の活動を支援する目的で、病理学会本部によるクラウドサーバーの提供など、必要な時期になってきているのではないかと考えています。

以上、九州・沖縄支部からの現状報告をいたしました。スラコンの際の学術講演会など、他の支部の先生方にも大変お世話になっております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

病理専門医制度運営委員会だより（第15号）

1. 専門医制度について（再掲）：

日本専門医機構による専門医養成プログラムも平成30年4月より全領域で正式に開始されました。病理領域でも113名の専攻医を採用することになりました。各プログラムの責任者をはじめ、指導に当たる先生方は、3年後に専攻医の皆様が無事に専門医試験を受験できるように、適切にご指導をお願いします。病理学会では昨年度からプログラム方式で専攻医の採用・研修を開始しています。以前より研修手帳（病理専門医研修ファイル）を利用した研修をしていただいておりますが、プログラム制度では年度ごとの評価も必要ですので、確実に「病理専門医研修ファイル」に評価の記載をお願いします。なお、評価方法についてはカリキュラム制で採用された方も同様、年度ごとの評価をお願いします。なお、カリキュラム制度はすでに他の基本領域の専門医資格（内科の場合は認定医も含む）所有者にたいして、つまり病理専門医資格とのダブルボードを目指す方が対象であることを改めて認識していただきたいと思います。また緊急避難的にカリキュラム制を用いることもでき、緊急避難的というのは、妊娠・出産・育児・介護・本人の疾病・大災害などによる研修施設の損壊などを想定しています。

平成31年度採用予定者のスケジュールですが、昨年度採用者より少し早めになっています。プログラムの一次審査（病理学会プログラム審査委員会による審査）に次いで専門医機構による二次審査と都道府県での調整が行われ、その結果を受けて9月1日から専攻医の募集が開始される予定となっています。昨年より1か月ほど早まっていますのでご注意ください。各プログラムの定員は、主に剖検数と指導医数から算定されますが、定員については平成30年度と同様の柔軟な判断をさせていただく予定です。すなわち、各学年の定員に対する採用人数の考え方以外に、プログラム全体の定員からの採用人数も考慮します。例えば、各学年2名の定員のプログラムに4名の応募があったと仮定します。学年単位で考えると、2名は遠慮していただくことになりますが、3年間のプログラム全体では2名×3年の6名が定員となるため、全員の採用が可能となります。ただし、この場合はあとの2年間は合計の定員が6-4=2名になります。なお、現在の専門医機構の専攻医募集枠では、定員オーバーの登録はできない仕組みになっていますので、学年単位の定員超過採用の場合は、まず病理学会事務局に連絡してください。連絡が入りましたら病理学会から専門医機構にお願いして、定員超過分も採用できるようにします。カリキュラム制度の方はプログラムの定員外ではありますが、施設全体での教育資源を考慮して採用していただく必要はあると考えています。

2. 専門医試験の会場について（再掲）：

過去3回のお知らせと同じですが、改めてもう一度説明させていただきます。専門医試験の会場は、従来2年単位で同じ支部の会場を用いてきました。また関東支部・中部支部・近畿支

部でローテートし、最寄りの新幹線駅からのアクセスが良好な会場を選択してきました。平成 29 年度（2017 年）は順番により近畿支部（神戸大学）で行われました。本来であれば平成 30 年度も近畿支部で行われるのですが、平成 30 年と 31 年（2018～2019 年）は関東支部（東京医科歯科大学）、次の平成 32 年（2020 年）は近畿支部（神戸大学）と、変則的な運用になります。これには二つの事情があります。一つは 2018 年の受験者は、従来の 4 年研修の方々と、2015 年から導入された 3 年研修の方々が同時に受験される年度になり、例年の 2 倍の受験者が出る可能性があります。この傾向は翌 2019 年まで続くものと思われます。このため、顕微鏡の準備（台数）を考慮して、歯学部顕微鏡も利用可能な東京医科歯科大学を会場とします。また 2020 年は本来であれば関東支部の担当ですが、ご承知のようにこの年には東京オリンピックが開催されます。病理専門医試験もオリンピックとはほぼ同時期となり、この状況で、東京で宿泊の予約をすることはかなり困難であろうと思われますので、2020 年は近畿支部（神戸大学）に戻って会場とします。

3. 病理専門医受験資格について（再掲）：

病理専門医受験に当たっては、最低限必要な資格、病理関連の業績、講習会の受講があります。ご承知とは思われますが、各施設で受験希望者が見える場合に、これらの確実な確認をお願いします。

死体解剖資格は必須です。これまでは 5 体の補助と 15 体の主執刀の合計 20 体で資格申請が行われていますが、平成 30 年度からは 20 体すべてが主執刀となります。また初期臨床研修期間の症例は死体解剖資格や病理専門医受験に使うことができません。専門研修開始後の症例だけが対象となり、かつ死体解剖資格は申請するために 1 例目の解剖から 2 年以上の経験が必要です。専門医試験願書の締め切りは例年 4 月末ですので、それに間に合うように、専攻医の先生方にはできる限り早く書類の提出をしていただくよう、ご指導をお願いします。なお、変更点の詳細は病理学会の HP で「死体解剖資格認定要領の改正に関して <http://pathology.or.jp/senmoni/20171116info.html>」として掲載していますので、ご確認をお願いします。

病理関連の業績については、病理診断学に関する 3 篇の業績が必要で、このうち 1 篇は筆頭でないといけません（病理学会総会や各支部会での発表も可）。また最低 1 篇の病理診断学に関する論文も必要です。論文は本学会が発行している診断病理や Pathology International (PI に関しては Letter to the Editor の可) 以外に、適切なレビューシステムのある病理関連の国際雑誌であれば認められます。また病理関係の雑誌でない場合でも、適切なレビューシステムのある雑誌であり、かつ論文の主旨に病理診断が関係し、病理診断に関する写真（図）があれば認められます。ただし国内誌で大学や病院など施設単位の紀要レベルのもの、都道府県単位の地方紙レベルのものは原則として対象外となりますのでご注意ください。なお、掲載雑誌が受験資格

として適切かどうかは病理学会事務局にお問い合わせください。

講習会については剖検講習会、病理組織診断に関する講習会（病理学会病理診断講習会もしくは国際病理アカデミー主催の講習会）、分子病理診断に関する講習会及び細胞診講習会（日本臨床細胞学会細胞診専門医有資格者は不要）が必修です。指導医の先生方は専攻医がこれら講習会を確実に受講しているか、確認をお願いします。これらの講習会参加証明書は専攻医が各自所持している「病理専門医研修ファイル」に貼付されることになっていますので、こちらを見てください。

4. 病理専門医資格更新について（再掲）：

本年度（平成 30 年秋）に更新を迎える病理専門医の皆様への重要なお知らせです。すでにご承知のように、専門医有資格者の更新が大幅に緩和されることになり、病理学会でもそれに対応して更新基準の緩和をしました。具体的な緩和事項として、① 領域講習（5 年間で最小 20 単位）と学術業績・診療以外の活動実績（0～10 単位）の単位互換、② 共通講習を 5 年間で最小 5 単位から 3 単位へ引き下げ、③ 領域講習対象の実質的な拡張、④ 1 日に取得可能な単位上限の撤廃、⑤ 学術集会参加による単位上限を 5 年間で 3 単位から 6 単位へ引き上げ、⑥ 連続 3 回以上の更新者は診療実績の 10 単位を免除した合計 40 単位でも更新可能などです。これにともない、病理学会の資格更新手引きや専門医資格更新ガイダンスの改定を行っています。病理学会の HP も改良し、見やすくなっていますので、確認のほど宜しくお願いします（<http://pathology.or.jp/senmoni/index.html>）。

資格更新に関しましては日本専門医機構の認定による更新と、従来の病理学会認定による更新と二通りの更新方法があり、専門医機構で更新された方は自動的に病理学会での認定更新もされることとなります（認定更新シールを配布します）。これは医療法上の広告可能専門領域に病理学会専門医が入っていますが、専門医機構専門医はまだ法律上の記載がされていないためです（いずれ追記されると思われます）。専門医資格更新は、可能な限り日本専門医機構による新しい病理専門医資格更新基準のもとで申請手続きをしていただきたいと思います。ただし、やむを得ない事情がある場合は学会専門医での更新申請もしていただけます。

日本専門医機構認定病理専門医資格の更新を行うには、「病理学会」による単位（該当期間：平成 25 年 11 月～平成 30 年 10 月）と、「専門医機構」による単位（該当期間：平成 27 年 4 月～平成 30 年 10 月）の両者のミックスで更新手続きをしていただくことになっています。具体的に説明しますと、来年度（平成 30 年秋）に更新手続きをされる先生方は、「病理学会として 1.5 年分と専門医機構として 3.5 年分」の単位が必要とされています。このため、病理学会分として合計で 100 点×1.5/5 年の 30 点が必要で、専門医機構分は平成 27 年 4 月以降のもの

で50単位×3.5/5年の35単位が必要となります。連続3回以上の更新された方は診療実績の単位を免除した合計単位（今回は27単位）が必要となります。ただし、診療実績を提出されない場合は、生涯教育委員会が作成した病理画像問題（今夏公開予定）に解答していただくことになりました。病理学会分は従来の計算方式で、例えば病理学会総会参加が20単位/1回、支部会参加が10単位/1回です。その他の学会や研究会の参加単位についてはHPなどを参考にしてください。専門医機構分は①診療実績として最小4単位（最大8単位）、②共通講習は最小3単位（最大8単位、ただし後述の必修3つが含まれている必要があります）、③領域講習が最小11単位、④学術業績・診療以外の活動実績が最小0単位（最大8単位）で、①～④の合計で35単位が必要となります。なお、③の領域講習と④の学術業績・診療以外の活動実績の単位は互換できます（実際には④の単位を③に回す事例が多いと思われます）。

病理学会分の点数確認には学会の参加証が必要ですが、参加証は必ず記名したもので、かつ名札部分と領収書部分を切り離さずに提出していただく必要があります（コピーも可です）。専門医機構分の各種講習会参加証は各講習会の会場で配布されますので、専門医番号と氏名を記載したうえで更新時まで各自で確実に保管してください。無記名のため書類再提出となる方が例年数名いらっしゃいますのでご注意ください。

専門医機構による専門医更新には共通講習の受講（5年間で3単位以上に変更、平成30年秋に申請をされる方については移行措置期間単位として3単位以上）が必要です。この5年間の3単位うち「医療安全」「医療倫理」「感染対策」の3つは必修です。共通講習については他学会（現時点では基本的診療領域）で開催されたものや、病理学会より認定されている施設（認定施設と登録施設、今後は基幹施設と連携施設）で行われたものでも代用可能です。後者の場合は施設長が発行した受講証が必要となります。各施設における受講証明書は専門医機構が見本を示した書類に準じたものにしてください（<http://www.japan-senmon-i.jp/renew/index.html>）。特に、講習会の時間が未記載の証明書が出てきた場合は、対応に苦慮しますのでご注意ください。ただし、この制度による講習会は平成29年度中まで有効ですが、平成30年度以降は事前に専門医機構に講習会の登録を申請し、許可の下りた講習会だけが単位の対象となっています。特に各施設で行う講習会については手続きが大幅に変わりましたので、詳しくは専門医機構のHPで確認をお願いします（http://www.japan-senmon-i.jp/renew/doc/kyotsukoshu_tetsuduki1805.pdf）。領域講習については、病理学会主催の学術総会における指定された講習会（臓器別診断講習会など）が対象となります。こちらは共通講習と異なり、各施設における講習会や他学会の講習会はクレジットの対象にはなりませんので、ご理解ください。

5. 今後の日程について：

- 平成30年度病理専門医試験は、平成30年7月28-29日に東京医科歯科大学で行われます。
- 平成30年度病理学会カンファランスは平成30年8月3-4日に愛知県犬山市の名鉄犬山ホテルで行われます。このカンファランスは病理専門医試験受験者の分子病理診断講習会の対象となっています。
- 平成30年度細胞診講習会は平成31年2月10-11日に東邦大学大森キャンパスで開催されます。

（文責：森井英一・大橋健一・中黒匡人・村田哲也）

==特集① 留学体験記=====

MGH Neuropathology 部門に留学して

北海道大学病院 臨床研究開発センター
生体試料管理室（バイオバンク） 畑中 佳奈子

12月のBostonは身を切るように寒かった。2016年12月クリスマス、長年勤めた北大病院病理部を離れ、夫と小学生の娘と大雪の中マサチューセッツ総合病院（MGH）のneuropathology部門に臨床病理の留学に出発した。留学を考え始め数年、留学を決心後時に胃に穴が開きそうになるような準備期間を経てついに留学に至った。臨床病理の留学を志し手探り状態だったが、出身講座の教授、他大学の臨床教授のご支援、そして夫の応援があり留学をすることができた。MGHのneuropathology部門にこだわったのは、大学院時代から興味を持って診断してきた中枢神経病理にWHO改訂で遺伝子情報が組み込まれ、その診断を学び今後に生かしたいと強く思ったからだ。

正月休みのないアメリカは1月3日が初日だった。Warren building 3階のneuropathology部門は温かみのある木の扉の部屋で緊張しながら入ると既にsign outが始まっていた。「遅れた!？」と時計を確認したが約束の9時前の8時55分。Neuropathology部門は毎朝8時半頃からsign outが始まるのだ。6人鏡を前に指導する先生に“Good morning”と恐る恐る声をかけるとなんと尊敬するDr. David N. Louis！突然の出会いに頭が真っ白となりながら自己紹介をすると笑顔とともに握手され、早速sign outに参加し流れるような解説をきくことになった。Neuropathology部門にはProf. Frosch以下5人の指導医がいる。Dr. Louisは現在病理部門全体のchairmanで多忙だが週1回当番を担当し、当番日は朝のsign out、術中迅速診断、病理解剖（脳のみ）、conference出席と、他の指導医同様fellowやresidentを指導していた。MGHは噂通り素晴らしく、毎日のsign outでの解説、tumor board、neuropathology独自又は病理部門全体の数々のlecture、内外のconference等、沢山のことを学んだ。Neuropathology部門では遺伝子解析も日常診断にうまく取り入れ術中迅速でgliomaと診断後病理医判断のもと遺伝子検索が進み手術の2日後にはIDH mutationやMGMT promoter領域のメチル化の結果が出た。勿論日米では病理医の数も保険

制度も異なりこれらを直に取り入れるのは難しい。だが MGH では常に「患者さんの為に」診断し、「将来の患者さんの治療につながる研究の為に」研究に加わり検体を取り分け、「今の自分の専門は教育」と言い切ることでできる Dr. もいるほど教育を重要視していた。MGH への留学では、診断知識の向上は勿論、「臨床」「教育」「研究」を両立実践する病理医に出会えたことが一番の財産となった。

留学とかけてドラクエで転職と解く

慶應義塾大学医学部 病理学教室 眞杉 洋平

私は臨床研修終了後、病理医として9年間働いた後、米国ボストンにあるダナ・ファーマー癌研究所、ブリガム・アンド・ウィメンズ病院ならびにハーバード大学医学大学院にて、荻野周史先生が中心となって運営されている分子病理疫学 Molecular pathological epidemiology (MPE) ラボで約2年間の海外研修を行ってきました。

「留学に行っても何が良かったですか?」とよく聞かれます。良かった点を挙げるときりがありません。妻や子供達との海外生活は毎日とてもハッピーだったし、ボストンでかけがえのない友人や同僚と知り合えたことも一生の財産です。素晴らしい指導者と出会い、世界最先端の研究室で興味深い研究テーマをもらい、研究も上手くいって、多くの論文も書けたのも運が良かったと思います。これらの答えは月並みで、これから留学を考えている後輩には何の足しにもならないと思うので、少し天邪鬼の私は時々こんな風な謎かけをします。留学とかけてドラクエで転職と解く。その心は、「どちらもレベル1から再スタートです」。

ドラゴンクエスト(略してドラクエ)シリーズでは、各キャラクターに勇者、戦士、僧侶、魔法使いなどといった職業が設定されており、ドラクエIIIでは更に別の職業に途中で転職できるというシステムが導入され、子供の頃に異様にはまった覚えがあります。レベル20以上になると転職する資格が得られるのですが、転職すると覚えた特殊能力(魔法など)は基本的にそのままですが、なんとレベルは1になり体力や力がガクンと下がって別の職業の見習いとして再スタートすることになります。当時子供心に、なぜまたレベル1から?と不思議に思ったものです。一般的に言って、日本から米国に研究ポスドクとしてやってくる臨床医は、米国ではただの人、最下層の使い捨て労働力として扱われるような研究室が多数ありますので注意が必要です。その点、我々病理医は、組織標本がみれるという特殊技量のために、どの研究室でも重宝される傾向があるので少し安心です。ただ新しい環境では、そのみでは成功できず、地道にコツコツと新しい手技や知識を習得し、経験値を上げ、信頼を勝ち取り、成果をあげなければ、突然クビにされ即帰国という道が待っています。私の場合、病理医中堅クラス(レベ

ル20!)によりやく達した後、留学先のラボでほとんど1から統計手法を勉強しました。恵まれた教育環境のおかげもあり、分子疫学の基礎から先進的な分子疫学手法までを一通り学ぶことができ、分子疫学医としてもかなりのレベルの技量を習得することができたと思っています。ドラクエでは、複数の職業を極めると他にはない特殊職業に就くことができるようなシステムもあります。留学でも同様で、研修先のラボで他では得られない特殊技量を習得すれば、唯一無二の病理医になれる大きなチャンスが得られるかもしれません。留学ってドラクエで転職するのと似ていると思いませんか?

Mayo Clinic 留学記

藤田保健衛生大学医学部病理診断学 山田 勢至

「月日は百代の過客にして〜(松尾芭蕉『奥の細道』)。芭蕉は45歳で旅に出たが、私も「留学への思ひやまず」、自分と子供の年齢を考えたら今しかない!と36歳のときに決意した。コネも能力もなかったが、虚仮の一念で夢にまで見た1年半のアメリカ留学の機会を得た。同期の友人が家を建てたり役職に就いたりしてどんどん落ち着いていく中、私は職を辞して住めるかたも車もすべて引き払い、妻、2歳の息子、生後2ヶ月の娘と共に日本を発った。

Mayo Clinic の Department of Pathology は総勢100人以上の大所帯で、その規模からして「さすがアメリカ!」と圧倒された。私を受け入れてくれた Department of Neuropathology には、多数の自施設の症例に加え、全米のみならず世界各国から山のようにはコンサルト症例が送られてきていた。私はそれらと教育用にストックされている標本を片っ端からみるという「脳腫瘍漬け」の毎日を過ごした。教科書でしか見たことのない稀な腫瘍にたくさん遭遇したが、コンサルト症例にはごく普通の腫瘍も多く、何処の国でも一般病理医は脳腫瘍を苦手に行っていることが伺えた。スタッフと一緒に顕微鏡を眺めていると、視野の動かし方ひとつ取っても無駄がなくて美しかった。ある日 Giannini 教授が持つ WHO blue book のカバーが赤いので不思議に思っ理由を聞くと、バラバラになったため製本し直したとの答えが返ってきた。確かによく見るとボロボロに使い込まれており、彼女レベルの人がそれほど努力していることに驚いたのと同時に、自分の不勉強を恥じた。彼女に所見などを質問されるときはいつも緊張したが、3ヶ月ほど経ったときにはじめて褒めてもらえたときは本当に嬉しかった。

Mayo Clinic のあるミネソタ州の Rochester は、約11万の人口のうちの6万人が Mayo の職員というまさに Mayo の街。少し車で走ると一面にトウモロコシ畑が広がるような田舎だが、治安は良く、冬の寒さが厳しい点を除けば家族と過ごすには良いところだった。妻もアメリカでの生活を満喫し、引っ込み思案だった息子はスーパーで可愛い女の子を見かけると“Hey,

what are you doing?”と私よりも遥かに流暢な英語でナンパをするまでになった（約40年掛けて熟成された私のねじ曲がった性格は1年半のアメリカ暮らしくらいではびくともしなかったが）。学問的なこと以外にも異国の地での生活から得られたものは計り知れず、私の人生において大きな財産になった。

今回の留学に際し多くの方々に助けていただきました。そして「旅に死せる」ことなく帰国後もこうして病理医として生計を立てていられるのは、藤田保健衛生大学および群馬大学の先生方をはじめとする皆様のおかげに他なりません。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

留学体験 米国ペンシルバニア州

The Children's Hospital of Philadelphia

大阪大学大学院歯学研究所 口腔病理学教室
宇佐美 悠

小学校低学年の時、二人の妹・母とともに、外科医だった父の研究留学について渡米しました。「いつか留学しよう」と思っていた私も、気がつけば3人の子供を持つ5人家族です。このままでは駄目だ、と方々に手紙を出していたところ、米国ペンシルバニア州にあるフィラデルフィア小児病院（The Children's Hospital of Philadelphia, CHOP）の小児整形外科研究室で主任研究員（PI）をされていた岩本資巳先生を紹介していただきました。岩本先生は、遺伝子改変マウスを用いて関節軟骨の発生について研究しており、癌の病理学的研究に使える新しい技術を探していた私は、遺伝子改変マウスについて学ぶため、全く未経験の軟骨研究を選びました。

CHOPは、本棟、リハビリ棟、外来棟に加え、二棟の大きな研究棟からなる巨大な小児病院です。すぐ隣には、名門ペンシルバニア大学および大学病院、近隣にはドレクセル大学、テンプル大学、トーマス・ジェファーソン大学といった有名大学があり、合同セミナー、共同研究もよく行われていました。研究は、私、PI、テクニシャンの3人からなるコンパクトなチームで行い、毎週月曜日に一週間の結果をもとに話し合い、研究計画を立てます。皆、夕方には帰宅してしましますが、徹底した分業と綿密な研究計画を重視するため、驚く程スピード感があります。様々な中央管理の先端機器には、その機器に精通したテクニシャンが常駐し、研究者が実験の条件設定に時間を費やすことはありません。また、先に色々な小規模実験を行い、正確な仮説をもとに細かな研究計画を立て、その計画が仮説の証明に有効か否か、を考えることに時間を割くため、結果のよくわからない無駄な実験が行われる事はほとんどありません。CHOPでの研究は非常に新鮮で、貴重な体験となりました。生活面では、子供達の事がとても心配でしたが、妻と彼らの努力のおかげで、一年半ほど過ぎた頃には、長女の友達が何人も泊まりにきたり、息子は友達家族と食事に出掛けたり、妻は公園

でママ友と井戸端会議（最も難易度の高い英会話！）、と地域にかなり馴染むことが出来ました。

さて、まとまりなく体験を述べさせて頂きましたが、将来、留学を考えておられる方には、「あえて違う分野もあり」、「病理学は役に立つ」の二点を強調しておきたいと思います。全身の臓器に関する知識、組織切片・染色の知識、画像解析の知識とセンスは、「病理医ならでは」のようで、まったく異なる分野であっても、きっと通用します。また、ここでは伝えきれないたくさんの経験と苦勞をしました。特に家族を連れての留学は大変ですが、得られる経験も格別です。お役に立てるかもしれませんが、気軽に相談してください。最後になりますが、留学を受け入れてくださった岩本先生、快く留学に送り出して下さった口腔病理・豊澤悟教授、いつも支えてくれた妻に感謝申し上げます。

留学体験記

甲南病院 病理診断科 山崎 隆

私は大阪警察病院（辻本正彦部長）の下で後期研修、その後神戸大学医学部附属病院病理診断科（伊藤智雄教授）で指導していただきました。現在は甲南病院病理診断科の所属となり、一人病理医として日々病理診断と格闘しております。神戸大学在職中、伊藤智雄教授、昭和大学病院プレストセンターの原田大先生のご高配により、2015年の9月から11月まで、Singapore General Hospital (SGH) 病理部門へ留学をさせていただき、世界的権威、乳腺病理医である Puay Hoon Tan 教授の指導の下、乳腺病理を勉強させていただきました。また SGH ではデジタルパソロジーも積極的に導入が進められており、最先端医療の現場を見学させていただきました。

SGH の病理部門の規模はシンガポールの中でも最大級であり、設備の整った清潔な環境に驚かされました。1年間の組織検体数は45,000件前後で、スタッフの数も45人前後の大所帯です。レジデントは皆希望に満ち溢れ、非常に情熱をもって学んでいる姿に感動しました。SGH には海外からの留学生の支援を主体にした Postgraduate Medical Institute (PGMI) の制度があり、私は fellow として研修させていただきました。PGMI の登録には志望動機を含め膨大な書類を提出しなければならず、健康診断等も必要であり、非常に厳格な制度と実感させられました。SGH では毎年 Breast Pathology Course という乳腺病理の国際学会が開催され、今までの学会の症例及び日常診断の症例等、膨大な乳腺の症例を勉強させていただきました。定期的に Tan 教授との症例のディスカッションの時間を設けていただき、些細な疑問であっても丁寧に指導していただきました。乳腺カンファレンスには必ず参加し、放射線部門や外科部門とのディスカッションも活発に行われ、学ぶべき点が多く有意義なものでした。Tan 教授は診断能力が優れているのはもちろんで

すが、スタッフへの気配りも非常に細やかで圧倒されるばかりでした。

デジタルパソロジーも早い段階から導入されており、カンファレンスや研究等で積極的にバーチャルスライドを利用し、ディスカッションもスムーズに行われている印象を受けました。現在甲南病院でもカンファレンス等にバーチャルスライドを有効に用いています。

SGH の指導体制は非常に機能的で学ぶべき点が沢山あり、海外の方々との交流のおかげで病理診断学の視野も広がりました。Tan 教授を始めとして SGH のスタッフには、診断の指導のみならず生活面においても手厚いサポートをしていただき非常に感謝しています。Breast Pathology Course には毎年参加を継続していますが、これからも国際学会以外にも機会があれば継続的に関わっていききたいと思っています。

MSKCC での留学体験記

香川大学医学部附属病院病理診断科・病理部 門田 球一
私は 2009 年から 2015 年にかけて、米国ニューヨーク市にある Memorial Slone-Kettering Cancer Center (MSKCC) の胸部病理・外科部門への海外留学の機会に恵まれ、胸部腫瘍の臨床病理学的研究および病理診断研修に従事することができました。帰国してからは 3 年以上が経ち、留学生在活が徐々に過去の思い出となってきましたが、ニューヨークでの生活を少し懐かしみながらこの留学体験記を書いています。

私の留学地であるニューヨーク市は言わずと知れた国際的巨大大都市で、世界の政治、経済および学問の中心であることはもちろん、MSKCC 以外にも多くの有名な大学や研究所が立地しています。MSKCC はアッパーイーストと呼ばれる高級住宅街に位置し、タイムズスクエアなどの観光地と比べると閑静で、ロックフェラー研究所やコーネル大学医学部などが近接し、アカデミックな雰囲気のある地区にあります。

私は家族（妻と子供たち）とともにマンハッタンの東側、イーストリバーのルーズベルト島にあるアパートメントに住み、職場まではトラム（映画の「レオン」や「スパイダーマン」などの撮影地として有名で、スキー場のゴンドラのような乗り物）あるいは地下鉄でイーストリバーを渡り、30 分ほどで通勤することができました。私の子供たちが通う小学校にはアメリカ人のみならず様々な国籍の子供たちが在籍し、母国語、肌や髪の色、宗教も多種多様で、ニューヨークがまさに人種のるつぼであることが実感させられました。

私の留学先のボスは MSKCC 病理部門の Dr. Travis という病理医です。Dr. Travis は胸部病理学の世界的権威で、胸部腫瘍の国際的分類（WHO 分類）の筆頭著者として知られていますが、とても優しく紳士的な方であるとともに、とても親日家で学会講演などを含め頻繁に日本を訪れておられます。お恥ず

かしいことに、私は MSKCC のことをあまり知らないままで幸運にも留学する機会に恵まれたのですが、世界的にも有名な癌センターである MSKCC での研究生活は想像以上に厳しいもので、当初は英会話や文化の違いに苦労の連続でした。

研究室では肺癌や胸膜悪性中皮腫の病理学的予後因子を解析し、遺伝子発現や遺伝子異常との関連性などを検討するとともに、MSKCC 胸部外科研究室と共同で、胸部外科医やフェローたちとともに胸部腫瘍における腫瘍免疫や免疫療法の研究をしていました。留学中は常に家族や同僚の支えに助けられ、最終的にはニューヨークでの生活は 5 年半という長期間となり、留学中の研究成果は国際学会で口頭発表し、英文医学雑誌に掲載できました。

しかし、「常套句」かもしれませんが）留学生在活での一番の成果や思い出は、研究室や居住していたアパートメント、子供たちの学校生活、ニューヨークの日本人コミュニティを通じて、多くの人たちと知り合い、友人になったことだと帰国後も実感しています。自身と妻は留学地において英語でのコミュニケーションに戸惑い、子供たちは帰国後の日本語学習に苦しんでいます。私と家族の留学地での経験が、いつか何からの形で（私は当然「病理医」として）日本での生活に還元できればと今は願っています。

留学体験記

九州大学形態機能病理 大石 善丈

現在 2018 年 6 月 18 日 14 時 12 分である。私は病理専門医部会会報編集委員九州沖縄支部担当である。「留学体験記」の特集原稿の締め切りは 6 月 15 日である。本日 17 時をもって事務局は北海道での総会に旅立つという。それまでに原稿を届けなければならないが私はだれにも原稿依頼をしていない。すっかり忘れていた。私が書くしかないが留学経験もない。が、このように筆をすすめているのは辛うじて、国内留学といえなくもない体験ならあるからである。

私にとって今回の本誌への投稿は 2 度目である。今から 12 年前、2006 年に病理専門医合格体験記を書かせていただいて以来である。ドイツワールドカップのあった年で、そのあと南アフリカ、ブラジルそして今年ロシアとあれから 4 回目のワールドカップを迎えていることに改めて時の流れの速さに驚くばかりである。その専門医試験に向けた勉強のために京都大学病院病理部に 1 週間お邪魔させていただいたのが、私の国内留学である。

私は 2000 年から 2004 年 3 月まで九州大学に大学院生として所属し、その後病理医を目指すことを決意し 2004 年、2005 年と飯塚病院病理部で勤務していた。現在では病理専門医試験勉強用のスライドの整備などが進んできているが、当時は珍しい症例で試験にでやすい標本の入手にかなり苦労する時代でも

あった。翌年に専門医試験を控えてそのような欲求を抱えていた私に願ってもないありがたいお話をくださったのが当時京都大学におられた三上芳喜先生である。三上先生がお持ちの1,000枚以上ある教育用スライドセットを「勉強のために見に来ていいよ」と言っていたのである。

感動とともに飯塚病院の上司に報告し、「ぜひ3か月ほど京都大学で勉強させてほしい」と申し出たところ即座に拒否されたのは言うまでもない。非常識な希望を出したもので全くお恥ずかしい限りである。お盆休みの3日間に有休を2日つけて1週間の夏休みとして京都大学にお邪魔するという常識的なプランに修正され、めでたく夏の京都に留学する機会を得た。

京都大学病院病理部では毎朝全員でティーチングスコープをのぞいて問題症例を検討したり、Ackermanを読み合わせしたり、マクロクイズ症例を検討したりする場に加えていただいた。また、たまたま外国の講師による乳癌の講演もあり、metaplastic carcinoma, spindle cell typeという言葉も覚えて帰った記憶がある。紡錘形病変では必ず鑑別に挙げて高分子サイトケラチンを染めるようにとのtake home messageを持ち帰った。また金曜日の夜は真鍋教授によるざっくばらんな講義も受けさせていただいた。ポテトチップスやピザとともにジュースが用意され、もぐもぐしながら真鍋先生のお話を聞かせていただいた。Flat epithelial atypia, columnar cell change, columnar cell hyperplasia, with atypiaといったところの概念についてのものだったと記憶している。そのような合間に、三上先生が用意してくださった教育用スライドセットをひたすら見続けていた。夜更けの帰り道にふと振り返ると五山送り火が輝いて見えたのが印象的であった。

もう10年以上も前のことだが、いまだにとっても充実した楽しい一週間として記憶している。最終日には川床料理にも連れて行っていただき、まさに至れり尽くせりしていただいた。三上先生をはじめ、京都大学のスタッフの皆様には本当によくしていただき、こうして書き出してみるとあらためて感謝の気持ちがよくがえる。

時は流れて現在では三上先生は熊本大学病理診断科の教授となられている。そして来月にはまた九州沖縄スライドコンファレンスをお世話していただくことになっている。

以上が私のひと夏の国内留学体験記である。

==特集② 私の恩師=====

Sometimes

浜松医科大学 腫瘍病理学講座 相村 春彦

NIH Bethesda campus の Old Georgetown Rd 側にある Building 37 には窓がない。私たちは、Lab Chief の Curtis C Harris 博士の部屋の丸テーブルを中心に座らされていた。一人、来客といっても隣のラボで、P450 の遺伝子を次々にクローニングをしている若い研究者もいた。私をご厄介になっていたのは、Harris

博士の率いる Laboratory of Human Carcinogenesis と今もあるラボで、人体病理をというか人体病理の訓練しか受けていない内外の病理を background にした30代を常に引き受けていた。Harvard 卒だの、西海岸の有名どころなど錚々たる有名どころであったが、病理の初期トレを思えばわかるように、みんなできなかった。Harris 博士は発がん研究で、当時は in vitro carcinogenesis の分野などで、有名な仕事をしており、さらに分子疫学部門を持っており、DNA 多型とがんの感受性といったテーマを設定していた。そのためには、分子生物学的な技量をもった member が必要だが、私たちの質にあきれたのかあまり、いつかなかった。

当時は cloning-sequence を大腸菌の増殖に合わせて24時間体制で進める競争的な研究室は世界中にたくさんあり、その日の来客は、その分野で、着々と大きな family の遺伝子群を拾い上げ、体系化していた。Harris 博士はもちろん、当時から、その分野で名の知られた碩学(それほど年はとっていないくても、視野の広さや、世界中に持っている connection などからそう思われていた。もちろんよくわからなかったが政治的 [policy of science という言葉をよく使った])にも影響力があった(いまでも still strong と言われている)。しかし、自分の体力で、手を動かして“もの”をとっている若い研究者にしてみれば、分子生物学的技術がいまひとつで、ヒトの系を用いるということで生き延びているという印象を持っていたのだろう。日頃は軽蔑感を隠していなかった。その彼が神妙な顔をして、われわれのような下っ端と同席している。彼が新たにクローニングした遺伝子の多型をわれわれは調べていて、地味な Southern blot を繰り返していた。ユタでものすごい日本人が VNTR 多型で論文を量産しているうわさが伝わっていたところである。タイプした原稿を持っており、これを超有名誌に送りたい。あなたを reviewer に指定してよろしいかというお願いである。あなたは fair だと聞いていると珍しく殊勝な調子で哀願調にも聞こえる。そのときの返事が、ニヤっとしながら sometimes と返した。I am fair sometimes という意味である。いろいろ文句ばかり



言っているわたしなのだが、西洋人の大人の対応というのはこういうのかと印象に残っている。

今年 Harvard を卒業する娘におくる父のことばというのがネットなどで話題になっていて (The Harvard Gazette; Letter from a father to his graduating daughter) 6 項目あってどれも含蓄に富むが最初のが Rule No. 1 — Life is not fair. Get used to it. である。ずるいじゃないかと思うことがあっても、諦めることも、努力を止めることもせず、したたかにあるいは柔軟にやっぴくんだらうな という、異質な人たちの集まる community で種々の経験を重ねていく重要性を改めて認識させられる。もう遅いけど。 (写真は 2001 年 9 月 12 日のものです)

== 支部報告 ==

-- 北海道支部 --

北海道支部会報編集委員 田中 敏

学術活動報告

2018 年 3 月 17 日 (土)、第 182 回日本病理学会北海道支部学術集会 (標本交見会) が鳥越俊彦先生 (札幌医科大学医学部病理学第一講座) のお世話で、札幌医科大学記念ホールにて行われました。

ランチョンセミナー

「がんゲノム医療の開始にあたって: 病理診断と病理組織検体取り扱いの重要性」

演者: 北海道大学病院 ゲノム・コンパニオン診断研究部門

特任講師 畑中 豊先生

「PD-L1 検査の実際」

演者: 奈良県立医科大学 病理診断学講座 教授

大林千穂先生

症例検討は以下の通りです

症例検討

番号 / 発表者 (と共同演者) / 発表者の所属 / 症例の年齢 / 症例の性別 / 臓器名 (主なもの) / 臨床診断/発表者の病理診断

17-17: 石井保志¹、辻 隆裕²、石立尚路²、今本鉄平²、岩崎沙理²、大内知之³、高橋健太⁴、深澤雄一郎² / ¹北海道大学大学院医学研究院分子病理学分野、²市立札幌病院病理診断科、³恵佑会札幌病院病理診断科、⁴国立感染症研究所感染病理部 / 40 歳代 / 男性 / 耳下腺 / 特異な組織像を示す耳下腺腫瘍性病変の一例 / Sclerosing polycystic adenosis : SPA

17-18: 大内知之¹、北村哲也^{1,2}、木村有貴³、谷口正信³、渡邊昭仁³、服部淳夫⁴、武内利直¹ / ¹恵佑会札幌病院病理診断科、²北海道大学大学院歯学研究科航空病理病態学教室、³恵佑会札幌病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科、⁴JCHO 北海道病院病理診断科 / 60 歳代 / 男性 / 耳下腺 / 多彩な組織像を示した耳下腺腫瘍 / Carcinoma ex pleomorphic adenoma

17-19: 今本鉄平、石立尚路、岩崎沙理、辻 隆裕、深澤雄一郎 / 市立札幌病院病理診断科 / 60 歳代 / 女性 / 睪腺 / 特徴的な組織像を示した睪内限局性腫瘍の 1 例 / Intraductal tubulopapillary neoplasia (ITPN)

17-20: 木内静香¹、野口寛子¹、鈴木宏明¹、平賀博明²、山城勝重¹ / ¹北海道がんセンター病理診断科、²北海道がんセンター骨軟部腫瘍科 / 70 歳代 / 男性 / 軟部 / 脂肪腫としてフォロー中に肉腫化が疑われた上腕軟部腫瘍 / Lipoma with nodular lymphoplasmacytic aggregates, s/o IgG4 related disease

17-21: 鹿野 哲、松田玲奈、伊藤真理子、村上洋平、矢代真一、佐々木豊 / 勤医協中央病院病理診断科 / 40 歳代 / 男性 / 甲状腺 / 細胞診で未分化癌も考えられた甲状腺腫瘍 / Atypical adenoma

17-22: 久保輝文¹、菅原太郎²、菊池泰弘¹、久保俊之³、瀬川恵子²、伊藤夢美香²、辻脇光洋²、藤田裕美²、杉田真太郎²、長谷川匡² / ¹札幌医科大学医学部病理学第一講座、²札幌医科大学医学部病理診断学、³札幌医科大学医学部消化器内科学 / 70 歳代 / 男性 / 胃 / 胃粘膜下腫瘍の一例 / Plexiform angiomyxoid myofibroblastic tumor

17-23: 大塚紀幸¹、大出貴士²、外丸詩野¹ / ¹北海道大学大学院医学研究院分子病理学、²東京女子医大八千代医療センター病理診断科 / 40 歳代 / 男性 / 上咽頭 / 上咽頭病変の一例 / Thyroid-like low-grade nasopharyngeal papillary adenocarcinoma with squamous differentiation

2018 年 5 月 19 日 (土) 北海道大学医学部特別会議室に於いて、平成 30 年度第一回北海道病理医会総会が行われました。

役員

北海道病理医会会長 (代表者)	深澤雄一郎
北海道病理医会副会長 (副代表)	外丸詩野
標本交見会担当幹事	田中伸哉
庶務・会計担当幹事	鈴木 昭
選挙管理委員長	今 信一郎
監事	立野正敏

施設代表者メンバー (アイウエオ順、敬称略)

池田 健 (函館五稜郭病院)、今村正克 (札幌診断病理学センター)、大内知之 (恵佑会札幌病院)、小山内 誠 (札幌医科大学医学部第二病理)、小山田ゆみ子 (斗南病院病理診断科)、鹿野 哲 (勤医協中央病院)、菊地慶介 (帯広厚生病院)、後藤田裕子 (札幌厚生病院)、小林博也 (旭川医科大学大学院免疫病理)、今 信一郎 (市立室蘭総合病院)、近藤信夫 (ジェネティックスラボ病理解析センター)、鳥越俊彦 (札幌医科大学医学部第一病理)、篠原敏也 (手稲溪仁会病院)、鈴木 昭 (KKR 札幌医療センター)、鈴木宏明 (北海道がんセンター)、高桑康成 (NTT 東日本札幌病院)、高田明生 (市立旭川病院)、高橋秀史 (北海道子ども総合医療・療育センター)、高橋利幸 (北海道消化器科病院)、武井英博 (旭川医科大学病院病理部)、立野正敏 (釧路赤十字病院)、田中伸哉 (北海道大学大学院腫瘍病理)、外丸詩野 (北海道大学大学院分子病理)、西川祐司 (旭川医科大学大学院腫瘍病理)、長谷川 匡 (札幌医科大学附属病院病理診断科)、深澤雄一郎 (市立札幌病院)、松野吉宏 (北海道大学病院病理診断科)

以上 27 名

平成 30 年度 事業計画

1. 日本病理学会北海道支部学術集会（標本交見会）

症例検討、病理領域別講習

平成 30 年度担当幹事：北海道大学大学院医学研究院

腫瘍病理 田中伸哉 先生

平成 30 年度標本交見会日程

第 183 回 2018 年 5 月 19 日（土）

第 184 回 2018 年 9 月 1 日（土）

特別講演 北川昌伸 先生

（東京医科歯科大学・日本病理学会新理事長）

標本交見会 50 周年記念祝賀会

場所：京王プラザホテル

第 185 回 2018 年 12 月 8 日（土）

希少がん対面講習 長谷川匡 先生

（札幌医科大学附属病院病理診断科）

第 186 回 2019 年 3 月 16 日（土）

場所：北海道大学医学部

2. 共催事業等

① 細胞診講習会（北海道臨床細胞学会との共催）11 月頃

② Lymphoma Clinico-Pathology Conference（LCPC）

3. 北海道病理医会奨励賞（MVP）

今年度も若い病理専攻医（専門医をのぞく）の中から、標本交見会で優秀な業績を示した人に贈られることになりました。

年間 1 名または 2 名、MVP 選考委員により選考する。

--- 関東支部 ---

関東支部会報編集委員 富田 裕彦

第 78 回埼玉病理医の会

開催日時：2018 年 2 月 23 日（金） 19 時～21 時

当番世話人：滝本寿郎（春日部市立医療センター病理診断科）

会場：春日部市立医療センター 多目的ホール

参加者数：20 名

開催内容

1. ミニレクチャー 改訂された上皮内腫瘍の診断と取扱い

PCL JAPAN 病理・細胞診センター 大倉 康男

（座長）春日部市立医療センター病理診断科 滝本 寿郎

2. 症例検討会

1) 右中耳腫瘍の 1 例

獨協医大埼玉医療センター 病理診断科 飯田 俊ほか
（座長）獨協医大埼玉医療センター 病理診断科 伴 慎一

2) 肝針生検で低分化扁平上皮癌の転移が疑われた 1 症例

春日部市立医療センター 病理診断科 滝本 寿郎ほか
（座長）獨協医大埼玉医療センター 病理診断科 飯田 俊

3) 胃生検症例

獨協医大埼玉医療センター 病理診断科 伴 慎一ほか
（座長）春日部市立医療センター 病理診断科 滝本 寿郎

--- 中部支部 ---

中部支部会報編集委員 浦野 誠

第 21 回日本病理学会中部支部スライドセミナー

日 時：2018 年 3 月 24 日（土）

会 場：名古屋市立大学

テーマ：婦人科病理

世話人：山下依子先生（名古屋市立大学）

参加者：171 名

【特別講演】

1. 三上芳喜先生（熊本大学医学部附属病院病理診断科）
「子宮頸部腺癌の病理」
2. 笹島ゆう子先生（帝京大学医学部附属病院病理診断科）
「卵巣腫瘍の病理：規約改訂後日常診断の実際」
3. 水野美香先生（愛知県がんセンター中央病院婦人科部）
「卵巣卵管腹膜腫瘍の最近の変遷」

【症例検討】

S2018-1 市立砺波総合病院 垣内寿枝子 10 代 女性

子宮頸部 Mucinous carcinoma, gastric type

MIB-1 標識率の高い乳頭状構造部分と明調細胞を含む管状構造部分とが混在した進行頸部腺癌例。前者部分の解釈、漿液性癌との鑑別が問題となった。MUC5AC、MUC6 陽性、p16 陰性を呈していた。

S2018-2 金沢医療センター 川島篤弘 40 代 女性

子宮頸部 Undifferentiated carcinoma with rhabdoid features and focal neuroendocrine differentiation

子宮頸部および体部、腹腔～骨盤内に巨大腫瘍を伴った症例。体部類内膜癌が広範囲に進展したものと考えられ、rhabdoid 細胞を含む脱分化癌成分が大部分を占めていた。術前化学療法の選択について討論がなされた。

S2018-3 藤田保健衛生大学病院 浦野 誠 70 代 女性

子宮 Cervical cancer, Mucinous carcinoma, gastric type

画像診断、マクロ像で明らかな異常の指摘が困難であった頸部胃型粘液性癌例。病変は腫瘍を形成することなく、極めて高度に子宮全体を境界不明瞭に置換浸潤していた。頸部に上皮内腺癌が観察され、MUC6、CAIX 陽性、p16 陰性であった。

S2018-4 愛知県がんセンター中央病院 出嶋 仁 40 代 女性

卵巣 Hybrid seromucinous and mucinous carcinoma (mixed mullerian carcinoma)

腸型上皮分化や淡明細胞を含む非典型的な seromucinous carcinoma 様腫瘍。NGS での遺伝子異常の検索結果が示された。形態、免疫染色、遺伝子異常は他の組織型との overlap がみられ、今後の seromucinous tumor の位置づけについて討論がなされた。

S2018-5 愛知医科大学 露木琢司 40代 女性

子宮体部 Perivascular epithelioid cell tumor (PEComa) with epithelial cysts, uterine corpus origin

3回の経過で再発を繰り返し、aggressive behavior とみなされた子宮 PEComa 例。初回診断時は平滑筋腫とされており、再発時には上皮性嚢胞構造を伴っていた。HMB45、cathepsin K が陽性を呈した。LAM との異同、鑑別についての討論があった。

S2018-6 岡崎市民病院 小沢広明 50代 女性

卵巣 Atypical carcinoid

両側付属器、腹膜播種部の切除が行われ、HPV-ISH 陽性を示す atypical carcinoid の像を呈していた。既往に頸部腺癌があり、その関連性についての考察がなされた。術後にソマトスタチンアナログ製剤が使用された。

【第 80 回交見会・中部支部学術奨励賞受賞式】

学術奨励賞 カテゴリー A (専門医試験合格前)

奥村結希先生 (名古屋大学医学部附属病院)

金山知宏先生 (岐阜大学医学部附属病院)

学術奨励優秀発表賞

相川あかね先生 (金沢医科大学病院)

次回学術集会・夏の学校

第 81 回日本病理学会中部支部交見会

日 時: 2018 年 7 月 7 日 (土) ~ 8 日 (日)

会 場: AOSSA 8F 福井県民ホール

世話人: 福井大学 小林基弘先生

夏の学校 2018

日 時: 2018 年 8 月 25 日 (土) ~ 26 日 (日)

会 場: グリーンビュー立山

世話人: 富山大学 井村穰二先生

第 82 回日本病理学会中部支部交見会

日 時: 2018 年 12 月 15 日 (土)

会 場: 名古屋大学医学部附属病院

世話人: 刈谷豊田総合病院 伊藤 誠先生

第 22 回中部支部スライドセミナー

日 時: 2019 年 3 月 9 日 (土)

会 場: 金沢大学附属病院

世話人: 金沢大学 原田憲一先生

-- 近畿支部 --

近畿支部会報編集委員 西尾 真理

I. 活動報告

日本病理学会近畿支部第 81 回学術集会が下記の内容で開催されました。(検討症例、画像等につきましては近畿支部 HP (<http://jspk.umin.jp/>) にて閲覧可能です。アカウント・パスワードの必要な方は近畿支部事務局 (jspk-office@umin.ac.jp) までお尋ね下さい。)

開催日: 2018 年 5 月 12 日 (土)

会 場: 神戸大学医学部大講義室

世話人: 神戸大学 横崎 宏 先生

モデレーター: 神戸大学 全 陽 先生

テーマ: 肝胆膵疾患

症例検討 (午前)

926 <演題取り下げ>

927 胸部悪性腫瘍の 1 例

武田 麻衣子 先生、他 (近畿中央胸部疾患センター病理診断科)

928 胸椎硬膜外腫瘍の 1 例

野土 希実 先生、他 (大阪市立総合医療センター病理診断科)

929 多彩な像を示し、診断に難渋した肝腫瘍の一例

本山 雄一 先生、他 (大阪大学医学部附属病院病理診断科、他)

930 肝膿瘍の一例

吉田 誠 先生、他 (神戸市立医療センター中央市民病院病理診断科、他)

支部総会・学術奨励賞授与

特別講演 1

『胆道腫瘍の分子病理』

全 陽 先生 (神戸大学 病理ネットワーク学)

病理講習会

1. 非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD)

伊倉 義弘 先生 (愛仁会高槻病院 病理診断科)

2. 膵腫瘍の最近のトピックス

安川 寛 先生 (京都府立医科大学 人体病理学)

特別講演 2

『肝腫瘍の診断で求められること』

相島 慎一 先生 (佐賀大学 病因病態科学 診断病理学)

II. 今後の活動予定

a) 平成 30 年度 近畿支部主催『病理 夏の学校』が開催されます。

開催日時: 2018 年 8 月 25 日 (土) 13:00~

会場: 神戸大学医学部会館シスメックスホール

国家試験対策病理診断演習 (出題・解説、神戸大学病理学講座)

若手病理医・病理学者からのメッセージ

1) 大学附属病院病理診断科で働く病理医から

神澤 真紀 先生 (神戸大学 病理診断科)

2) 総合病院病理診断科で働く病理医から

山下 大祐 先生 (神戸市立医療センター中央市民病院 病理診断科)

3) 病理学研究への招待

野島 聡 先生 (大阪大学 病態病理学)

病理専門研修制度について

病理専門医と病理専門研修制度の概要
森井 英一 先生（大阪大学 病態病理学）

懇親会（神戸大学生協医学部医学科食堂）
近畿地区病理専門研修プログラム各責任者からのアピール

b) 第 82 回学術集会在下記の内容で開催されます。
開催日：2018 年 9 月 8 日（土）
会 場：京都大学医学部
世話人：京都大学 羽賀 博典 先生
モデレーター：近畿大学 榎木 英介 先生
テーマ：人工知能（AI）の病理診断への応用～可能性と展望

午前：症例検討
午後：（予定・タイトル未定）
特別講演 1
吉澤 明彦 先生（京都大学 総合解剖センター／病理診断科）
特別講演 2
備瀬 竜馬 先生（九州大学 情報知能工学）
病理講習会
森 秀夫 先生（大阪労災病院 病理診断科）

中国四国支部

中国四国支部会報編集委員 串田 吉生

B. 開催予定

1. 第 126 回学術集会
日 時：平成 30 年 7 月 7 日（土）
世話人：島根大学医学部病理学講座（病態病理学）
並河徹教授

2. 病理学夏の学校
日 時：平成 30 年 8 月 18 日（土）19 日（日）
会 場：川崎医科大学現代医学教育博物館
レスパール藤ヶ鳴
テーマ：マクロ病理を極めよう！
世話人：川崎医科大学病理学 森谷卓也教授

九州・沖縄支部

九州・沖縄支部編集委員 大石 善丈

第 363 回九州・沖縄スライドコンファレンスが下記のように開催されました。

日 時：2017 年 5 月 19 日（土）13:00～18:00
場 所：九州大学病院地区 百年講堂
世話人：九州大学大学院医学研究院 形態機能病理
小田 義直
参加数：206 名

第 363 回スライドコンファレンス

臨床診断あるいは発表演題名 / 発表者 / 発表者の所属 / 症例の年齢 / 症例の性別 / 出題者診断 / 投票最多診断

座長：平木 翼（鹿児島大学）

1. 甲状腺腫瘍 / 黒濱大和 / 長崎大学原研病理 / 50 代 / 男性 /
Hyalinizing trabecular tumor /
Hyalinizing trabecular tumor (adenoma / neoplasm)
2. 縦隔腫瘍 / 西山憲一 / 福岡赤十字病院 病理診断科 / 60 代 / 男性 /
Malignant mesothelioma with cystic formation / Thymic cyst
3. 肺病変 / 木下義晃 / 福岡大学医学部病理学講座 / 40 代 / 男性 /
Desquamative interstitial pneumonia (DIP) / Langerhans cell histiocytosis
座長：古賀 裕（九州大学）
4. 胃ポリープ状病変 / 前川和也 / 宮崎大学構造機能病態学 / 80 代 / 女性 /
Benign mesenchymal polyp / Inflammatory fibroid polyp
5. 膵腫瘍 / 佐野直樹 / 熊本大学医学部附属病院 病理診断科 / 80 代 / 男性 /
Pancreatoblastoma / Neuroendocrine tumor
6. 膵腫瘍 バーチャル / 谷川雅彦 / 久留米大学医学部病理学講座 / 70 代 / 女性 /
Pancreatic hamartoma / Hamartoma
座長：伏見文良（九州中央病院）
7. Urinary bladder tumor / 木下史生 / 九州大学形態機能病理学 / 40 代 / 女性 /
Clear cell adenocarcinoma / Clear cell adenocarcinoma
8. 右頬皮膚 / 平木翼-野元三治 / 鹿児島大学病院-鹿児島医療センター / 80 代 / 男性 /
Porocarcinoma, squamoid variant / Squamous cell carcinoma
9. 背部皮下腫瘍 / 吉河康二 / 別府医療センター病理診断科 / 50 代 / 女性 /
Nodular fasciitis / Nodular fasciitis
座長：西田陽登（大分大学）
10. 多発皮下腫瘍バーチャル / 門脇裕子 / 大分大学 / 0 歳 / 男性 /
Subcutaneous panniculitis-like T-cell lymphoma /
Subcutaneous fat necrosis of the newborn
11. 頭蓋骨腫瘍 / 本下潤一 / 浜の町病院 / 70 代 / 男性 /
Intraosseous meningioma / Meningioma
12. 脳幹部腫瘍 バーチャル / 司城昌大 / 九州大学大学院医学研究院神経病理学 / 10 代 / 女性 /
Post-transplant lymphoproliferative disorder, diffuse large B cell lymphoma /
Post-transplant lymphoproliferative disorder

また同日に九州沖縄スライドコンファレンス世話人会と日本病理学会九州・沖縄支部総会が開催され、以下の報告と議題の承認がなされました。

平成 30 年 5 月 19 日

スラコン世話人会 平成 30 年度議題

1. 役員改選
2. 平成 30 年度の開催予定
3. スラコン各機関の出題・投票・出席状況
4. 新規加盟機関、世話人
（新規加盟機関）
福岡東医療センター 病理診断科 藤田 綾
中頭病院 病理診断科 仲田典広
中部徳洲会病院 病理診断科 小川真紀

(世話人交代)

福岡歯科大学 生体構造学講座	岡村和彦→	岡野慎士
佐賀県医療センター好生館	森 大輔→	増田正憲
佐賀大学 病因病態科学講座	増田正憲→	木戸伸一
福岡大学 病理学講座	濱田義浩→	林 博之
九州労災病院	内橋和芳→	横原康亮
新古賀病院	徳永 藏→	西田直代
宮崎県立宮崎病院	島尾義也→	丸塚浩助

5. バーチャルスライドの今後について

日本病理学会九州沖縄支部

九州・沖縄スライドコンファレンス

世話人幹事 小田義直

日本病理学会九州沖縄支部平成 30 年度総会

日時：平成 30 年 5 月 19 日（土）

於：九州大学病院地区 百年講堂（スラコン会場）

1. 報告事項

1) 日本病理学会九州沖縄支部優秀症例報告賞 授賞式

2) 第 7 回九州沖縄支部病理学校

（第 7 回初夏の病理学校 2017 波戸岬）

3) 各種委員会

業務委員会、若手病理医の会、学術委員会、ホームページ委員会、女性病理医支援窓口、TF 委員会、広報委員会

4) 九州沖縄支部スライドコンファレンスとコンサルテーション運用システム

5) その他

(1) 日本病理学会の AMED 委託事業「AI 等の利活用を見据えた病理組織デジタル画像（WSI）の収集基盤整備と病理支援システム開発」について

(2) VS Working Group（VS サーバー問題）

2. 議題

1) 日本病理学会九州沖縄支部・役員の交代（案）

2) 平成 29 年度決算報告（案）

3) 平成 30 年度予算（案）

4) 第 8 回九州沖縄支部病理学校

（第 8 回秋の病理学校 2018 あしきた）

付記：病理学会委員会における九州沖縄支部関連者

=====

病理専門医部会会報は、関連の各種業務委員会の報告、各支部の活動状況、その他交流のための話題や会員の声などで構成しております。皆様からの原稿も受け付けておりますので、日本病理学会事務局付で、E-mail など御投稿下さい。病理専門医部会会報編集委員会：柴原純二（委員長）、田中 敏（北海道支部）、長谷川剛（東北支部）、富田裕彦（関東支部）、浦野 誠（中部支部）、西尾真理（近畿支部）、串田吉生（中国四国支部）、大石善丈（九州沖縄支部）

=====

日本病理学会コンサルテーションシステム 謝辞

平成 29 年度日本病理学会コンサルテーションシステムにおきまして、ご尽力を賜りましたコンサルタントの先生方に心より感謝申し上げます。本システムのコンサルテーションをお引き受けくださった先生方を以下に記載させていただきます。

平成 30 年 6 月吉日

一般社団法人 日本病理学会

理事長 深山 正久

相島 慎一	秋山 太	味岡 洋一	新井 栄一	新井 富生	有澤 正義
石川 雄一	石田 剛	泉 美貴	井上 健	井下 尚子	今村 好章
岩田 純	岩淵 英人	岩渕 三哉	植田 初江	浦野 誠	大江 知里
大島 孝一	大林 千穂	岡 輝明	小川 郁子	長村 義之	尾島 英知
小田 義直	小幡 博人	海崎 泰治	覚道 健一	鹿毛 政義	亀山 香織
川本 雅司	岸本 宏志	清川 貴子	草深 公秀	九嶋 亮治	小島 史好
小島 勝	小西 英一	小森 隆司	桜井 孝規	佐々木 惇	佐々木 恵子
笹野 公伸	塩見 達志	渋谷 和俊	澁谷 誠	城 謙輔	新宅 雅幸
菅井 有	鈴木 博義	鈴木 正章	砂川 恵伸	関 邦彦	園部 宏
竹内 真	竹下 盛重	立山 尚	田中 伸哉	田丸 淳一	津田 均
土屋 眞一	都築 豊徳	堤 寛	手島 伸一	土居 正知	豊澤 悟
長尾 俊孝	長坂 徹郎	長嶋 洋治	名方 保夫	中谷 行雄	中沼 安二
中峯 寛和	中村 栄男	中村 直哉	二階堂 孝	仁木 利郎	二村 聡
野口 雅之	野島 孝之	羽尾 裕之	長谷川 匡	長谷川 博雅	林 博之
久岡 正典	比島 恒和	平戸 純子	蛭田 啓之	廣川 満良	廣島 健三
廣瀬 隆則	福永 真治	藤林 真理子	堀井 理絵	本間 慶一	本間 琢
増田 しのぶ	松野 吉宏	松本 俊治	三上 修治	三上 芳喜	湊 宏
村田 晋一	元井 亨	森谷 鈴子	森永 正二郎	森谷 卓也	八尾 隆史
安田 政実	谷田部 恭	柳井 広之	柳澤 昭夫	山川 光徳	山口 岳彦
山元 英崇	横尾 英明	吉川 洋	吉田 朗彦	吉野 正	若狭 研一
渡辺 みか					

(敬称略)